姉川明子を偲んで
朗読公演会

日時 2011年4月2日(土)14時開演

会場 シアトリカル應典院

朗読劇団・朗読 GEN

新しい朗読劇をめざして、2003年に結成。GENは漢字をあてれば「元」である。物事の初めという意味と元気の元をかけている。初心を忘れず、見る人に元気になってもらえる舞台を創りたいという思いをこめて命名した。

時代小説、現代小説、童話、そして近松門左衛門「曽根崎心中」、芥川龍之介「地獄変」、泉鏡花「夜叉ケ池」などにも取り組み、幅広いジャンルに挑戦している。昨年の定期公演は、太宰治「走れメロス」を取り上げ好評であった。神社、学校、地域の交流センターなど、場所を問わず公演をしている。団員、スタッフ募集中。ぜひ、稽古見学にお越し下さい。

朗読グループ あじさい

2002年初め、朝日カルチャー京都（楽しい朗読）研究科卒業生で作ったグループ。カルチャー在籍10年前後のメンバーで現在までほぼ同じ顔ぶれ。カルチャー時代は毎年宇治少年院にて朗読会を開催し舞台経験を積む。あじさい発足時に姉川明子氏に師事。師の強い勧めで、あじさいとしての公演実現に至る。師亡き後、あめんぼ座、泉谷聖子氏に師事。

2005年「芦の中の一夜」「うらぼんえ」（京都パレスサイドホテル）
2007年「弁財天の使い」「へんろう宿」「あともどり谷」
2008年「家守綺譚」「風薫るウィーンの旅6日間」「羅生門」
2009年「しだれ桜」「縄」「雛の花」（07〜09はウィングス京都）

朗読グループ・萠

朝日カルチャー神戸教室の仲間が、2000年秋の玉川侑香絵本原画展で朗読をしたことがきっかけで、朗読の魅力に目覚め小学校の震災行事や酒蔵の「語りべの集い」などで、絵本の朗読をするようになった。2001年にグループ結成。02年2月、第1回公演を北野シアターポシェットにて開催。幼稚園、小学校をはじめ、各種団体の催しなどで朗読。自主公演活動も行っている。聴く人の心にしっかり届く日本語を目指して朗読のすばらしさを追求し続けている。

1995年 泉鏡花作「高野聖」から

座談会——姉川明子を偲んで

出席者
司会　秋山 太加（朗読劇団 朗読GEN代表）
東野 仁美（朗読グループ 萌代表）
和田 明子（朗読グループ あじさい代表）
姉川 昌雄

姉川明子がめざしていた朗読劇とは・・・・
朗読か、演劇か。—果たして線引きはあるのか—
思い出と共にこれからの朗読劇を考える

姉川明子が2003年に逝って、7年半が経つ。ここに改めて師のめざしていたものを振り返ってみようと出演3団体の代表が集合し、恩師の遺影の前で、今回の企画をされた姉川昌雄氏にも加わってもらい語り合った。

■姉川明子との出合い

—少し、おおげさなタイトルになりましたが、思い出を話しながら考えていきたいと思います。まず初めてお会いになったのはいつですか。

和田　平成の初め、司会の勉強に司会者協会に行った時に先生の発音、発声クラスがあり、それを受講した時です。その後協会を離れて朗読の勉強会を続けましたがメンバーが少なくなり消滅。それで、京都の朝日カルチャーのあめんぼ座の教室に入りました。この時は先生はたまに代稽古に来られるくらいでした。

東野　1998年に神戸の朝日カルチャーで先生にお会いしました。日本語の勉強をしたくて見学に行って、すっといるのも悪いと思っていたら「最後までいたらいいじゃない」と言ってくださって、それが嬉しくて入りました。

秋山　私も先生の笑顔にまいったんです。森ノ宮教室を見学した時「お入りになる」とすごくあでやかな笑顔で言われて。即、「はいっ」（笑）

—その後、皆、独立するわけですけどその経緯について、和田さんからお願いします。

和田　02年1月カルチャーを離れて、朗読グループを作って、月2回教えてもらいました。亡くなる前の1年間だけでしたが、7年たっても教えを受けたことが強烈にみんなの気持ちに残っています。

東野　01年5月にカルチャーを辞めて5人で設立しました。「やる気のある人には教える。どこにでも行くわよ、5年は頑張りなさい、お金を取ってやれる位になりなさい」と言われました。2000年に「父ちゃんのオカリナ」の稽古をした日、神戸で17時まで練習した後、大阪の教室に行かれ、又20時に戻って来られました。「父ちゃん」の一言が出来なくて「東野さんは居残り」（笑）
その後グループの発表会をしたいと指導頂いている先生にお伺いしたところ、何を生意気なとものすごく怒られました。
姉川先生に相談したら「いいじゃない。やりたかったらどんどんやりなさい。」と言って後押しして下さったんです。あの時のことがなかったら今の萌はありません。

秋山　先生は最後まで妥協されなかったですね。しごかれた記憶は一杯あります。話してたら終わりません（笑）今回の演目の「片葉の芦」は研究生の発表会の最後の作品です。この終演後すぐ「これでここの指導やめるから」って。晴天の霹靂でした。後から考えたらすごく稽古が厳しかったのは、そのせいかと・・・・「私の名前だけで通用するようになったし、一人でやっていける。あと10年楽しめると思う」と勢い込んで話しておられました。それが02年の7月です。結局5人で朗読GENを立ち上げました。03年3月、活動開始前に来て下さり「規約作ること、何でも話し合うのよ。絶対入場料取りなさい」「エーっ無理です」って抵抗しましたが、お金を取って聞いてもらえるようになれということだったんですね。

和田　うちも読書グループだったんですよ。先生が公演しなさいと言われたんです。さすがに入場料とは言われなかったけど。狭いところじゃなく200人は入るところって。

■指導への情熱

—思い出のシーンといえばどんな時ですか。

東野　03年3月、「よだかの星」の稽古の時です。「今日はほめてもらえる」と思って先生を待ち構えていたら開口一番「バーラバーラじゃないの。全然なってない。」みな唖然。「みんなが同じ世界にはいってないとだめ。東野さん、人が言ってるときに何一人で頷いてるの。一緒の世界に入ってないよ」皆、はっとして目が覚めたようでした。

和田　あじさいとしては1年ちょうと教えてもらっただけですけど「叩き込むわよ」という感じで、発声法、呼吸法から教えてもらいました。目からウロコでした。大声を出したらいいということではないと。いろんな教材を持って

座談会 姉川明子を偲んで

きて面白いドタバタ劇を身振り手振りでやってみなさいとか。

秋山　GENの第1回の公演はキャスティングと台本の手直しはしてもらったのですが、その後で入院され、あとはテープを送って聞いて頂きました。「声高い、一本調子やよ」などの注意を必死で聞きました。でもやっぱり活動開始に向けて真剣にアドバイスして下さった時のことが忘れられません。先生の気迫に圧倒されました。遺言だと思っています。でも02年の夏一人で活動すると意気込んでおられた時のお元気な様子と03年3月の悲壮感との落差が激しくて思い出すたび辛いです。

■作品の根幹にあるものを伝える

—とにかく妥協せずに稽古されたのですいぶん厳しかったと思いますが如何ですか。

東野　「きれいに読んでいるだけよ、力が入り過ぎ」とよく言われました。一番印象深いのは谷川の様子を語る時の稽古です。「ハイヒールで入ってる、どうしてそんなことになるの、素足で入るのよ。うわべだけの読み方はだめ」忘れられません。厳しい指導を受けたからここまで続けてこられました。メンバーの本田は「厳しさ、怖さが快感で、ビシッと言われるのがワクワクして緊張感があってすごく吸収できた」と言ってました。

秋山　02年の「片葉の芦」の時おにぎりを取る場面で取り方が違うと20回位やり直し。必死で練習しましたがOKまで行ったかどうか？それからダンボールを持って走って置けと言われましたが先生は途中でまた方法を変えるんです。せっかく覚えたのにまた一からでまいりました。「女丸出しで走ってるよ」って。裸足で稽古場の廊下で走って練習しました。懐かしくて笑えます。

和田　椅子持って走ってるように見えました。すごい力って（笑）

秋山　語りだけどセリフのようにぼーっとして言えと要求されて前日まで苦しみました。本番も先生の思うようにできなかったですね。この頃は研究生の指導は先生にまかされていて動きも入れる姉川朗読劇になって来ていました。

—指導上の悩み—

姉川　帰ってきたらよくぼやいていました。「みんながでけへん、表現したいことがうまくできない」と言ってましたが、彼女は皆さんと舞台創りをすることが最高に楽しかったのだと思います。だから夢中で続けていたのでしょうね。

和田　呼吸法で「頭蓋骨に響くように」とか表現が独特でした。言われる通りやると気持ちよくて。其々のレベルに応じて教えて頂きました。カルチャーだったので優しく教えて頂いたのではないかしら。

東野　カルチャーでも「やる気のある人にはどこまでも教える」という姿勢でした。だから一見やる気のある方に先生が「表現できてない」と言われたのですが辞めていかれました。褒められることを期待されていたのでしょう。

姉川　そのことではよく悩んでいました。カルチャーとそうでない人には教え方を変えていたかも知れません。プロを目指す人には指導をビシバシやるけどカルチャーは経営母体が困ることになってはいけないと気を使っていました。カルチャーは趣味だから続けていくことが大切だと思っていたかな。

和田　でも手を抜いてるということではなかったです。一生懸命真摯に教えて下さったし、言われることは納得できたからみんなついて行きました。

秋山　先生には妥協しない、諦めないという精神を学びました。「上方芸能」の中で、作品を選ぶときは「読み手が声に出して表現してみたいという真の衝動の持てるもの」を選べと書いておられますが、自分が感動しないものは、人を感動させられないということだと思うのですが。

姉川　手帳を見ると、すごい数の指導をこなしていたことがよくわかります。オーバーワークだったな。これだけ全てに全力投球するのはちょっとできないことですね。

—そういう活動を知って今回の企画をされたのですか

姉川　1回目の追悼公演をした時はこんなにたくさん教えているとはよくわからなかった。皆さんが続けておられることに感謝し、本人にも聞かせておく必要があると・・・

和田　また怒られそうです（笑）自分が演じるより指導の方が増えておられたんですね。

姉川　ここ1、2年で活動の全体が見えてきて、それがきっかけになりました。私の勝手な想像ですが、今でも皆さんを叱咤激励していると思う時があり、もうゆっくり休めと言ってやりたい。

秋山　こんなに指導にうちこんでいたんだなと驚いて、感銘をうけられた？

姉川　そうです。それで今回のことを企画するにあたって、私なりに朗読劇について考えてみました。

■これからの朗読劇について

姉川　かなり以前のことですが、明子があめんぼ座の座員として出演していた公演を初めて見て観客が女性ばかりで、しかも年齢が高い人が多いのに違和感を覚えました。男性や若い人が増えないと将来の展望がないのではと話したことがあります。もちろん今の状態で続けていくことに意味はあると思いますが。

—観客層を広げるために—

姉川　最近は朗読劇という言葉が定着してきました。演劇的要素がどの程度必要かは別にして、朗読であっても歩き方、台本の持ち方とか、姿勢とか舞台上での全てについて声だけでなくきっちりマスターしないと、お客も増えていかないと思います。彼女に言いたかったことの一つです。30年位前に鈴木忠志の演劇を利賀村で見て白石加代子の動きにびっくりしましたが、現在の「百物語」を見ても、あの訓練が生きているなと思います。朗読劇は言葉が基本にありますが、舞台に立つ人の身体的表現がどの程度加わるかによって、伝わるものがずいぶん違ってくるでしょうね。

—朗読劇と演劇—

秋山　白石加代子は俳優の基礎を体に叩き込んでいるから、舞台上の動きに全て意味があって、目線や体のひねりだけでも感じが出る。声のバリエーションも凄い。百物語を見るうち、朗読も朗読劇も演劇の1つのジャンルと考えるようになってきました。

和田　でも演劇とは違うでしょう。

秋山　文学をそのままやるのと、脚本化してセリフだけでやるのとの違いがあると思います。しかし、最近の演劇の中に朗読劇のように語りを入れるやり方をいくつか見ました。お互いに手法が交流しているように思えます。

和田　演劇とは違う朗読劇としての方法があると思いますけど。

秋山　もちろんそうですね。ただ先程の鈴木忠志が「一人の人間が音声を発して喋るという行為自体にドラマを見つけ出すことが演劇の基本です」と書いていて、そういう意味では朗読も、朗読劇も演劇の中の一つのジャンルと考えていいのかなと思うのですが・・・。

姉川　白石加代子の舞台はあの人だけのものですが白石加代子の考え方とか舞台の創り方に明子は共鳴していました。

和田　鴨下信一さんはかなり演出の手を入れておられるのでしょうか。白石さんが割合勝手にやってるように見えますが。

秋山　パンフにはかなり細かく語りも演出されると書いてあって、白石加代子の弁では「私稽古して頂かないとできない」と。他の朗読劇を見る機会がありましたが、客数は少ない。百物語は満席なのでそれだけ魅力があるということではないでしょうか。

姉川　明子は演出も、演じることも、やってみたいことが多くあったのではと思います。

和田　「送り提灯」の舞台では奇抜な衣装を考えられてましたし。

秋山　一杯挑戦したいと意欲に燃えておられた矢先に倒れてさぞ無念だったと思います。先生の「だめよそんなんじゃ」という声をもう一度聞きたいですね。

—新しい方向に向けて—

朗読劇もこれから様々な形が創られていくでしょう。でも多くの人に文学の面白さを味わってもらいたいというのが目標であるのは朗読も、朗読劇も変わらない。最近は少しずつ若い人にも男性にも楽しんで頂けるようになって来ていると感じています。

今は興味も細分化されていて圧倒的にどの世代にも受けるという時代ではないですから50代以上の女性に人気があるのは嬉しいことです。ある程度観客層を絞りつつ新しい若い感覚を取り入れた舞台創りをしていきたいですね。先生も常に次は何か違うことをやってみようと考えておられたと思います。

姉川 明子：あねかわ あきこ。
元ＮＨＫアナウンサー山上みち子主宰の大阪朗読研究会に入会。劇団四紀会を経て1981年にあめんぼ座へ、後代表を努める。ＮＨＫ文化センター、朝日カルチャーセンター、劇団ひまわりを始め、多くの小さなグループも指導する。
2003年10月18日 没

キャスト

■よだかの星

構成・演出……本岡 陽子
　　東野 仁美
よだか……渡辺 候子
鷹・大熊座……藤井 富美子
かわせみ・小鳥1……渡瀬 博美
鷲の星・小鳥2……磯川 陽子
お日さま……東野 仁美
大犬座……本岡 陽子

■オリヲン座からの招待状

構成・演出……笹野 泉
祐次……近藤 八重子
良枝……太田 馨子
仙波……和田 明子
語り……柴田 満智子
　　蟹池 敏子
　　柴田 久子
　　森本 明子
　　鳥羽 ひろ子
　　久保 早苗
　　吉岡 ひとみ

■片葉の芦

構成・演出……秋山 太加
彦次……福嶋 左知子
お美津・お園……秋山 太加
藤兵衛・茂七……太田 淑子
源助・番頭……田中 章恵
そば屋の客……東野 仁美（朗読グループ 萌）
　　本岡 陽子（朗読グループ 萌）

スタッフ

総合構成……秋山 太加
音響……西角 秀紀
照明……加藤 直子
舞台監督……佐野 泰宏
宣伝デザイン……桂 瑞子
制作……丹原 祐子（office P・T企画）
記録……中川 裕康
主催……姉川 昌雄
協力……堀川 希絵・野島 彩加
　　ＭＩＹＡ・よこがわくみこ
稽古場協力……(有)ムーブファクトリー

あらすじ

よだかの星

よだかは、その姿、形ゆえに、他の鳥から疎まれ、蔑まれ、その名ゆえに本物の鷹から嫌われ、脅され続けました。その自分が、平気で羽虫を食べて生きる宿命にあると気づいた時、よだかはこの辛い世界を捨てようと決意して、一直線に空をのぼって、のぼってついに青白く燃える星となったのです。

オリヲン座からの招待状

京都西陣での幼馴染み、三好祐次と良枝は故郷を離れた東京で結婚したのですが、今は別居して2年になります。そんな2人に、ふるさとの西陣で送った幼かった日を思い出させるオリヲン座の最終興行の招待状が届きました。祐次と良枝は複雑な思いを抱いて京都に向かいます。ふるさと西陣は伝統の織物産業が衰退して、かつての華やかさはすっかりなくなっていました。しかし、2人が通ったオリヲン座と館主の仙波留吉は歳をとりましたが、昔と変わらぬたたずまいで迎えてくれました。

片葉の芦

近江屋藤兵衛が死んだ。釜の湯が沸き立つそば屋で客たちが噂話に夢中である。「やったのは、お美津。回向院の茂七はどうやらそうにらんでいるらしいぜ」客たちの声が店の職人、彦次の耳に飛び込んでくる。思わず違うと胸の内で叫ぶ彦次、心配そうに見守る親方の源助はその夜、居酒屋に誘い、10年前の出来事を聞くが・・・

作者紹介

宮沢 賢治
1896（明治29）～1933（昭和8）39歳で没

岩手県花巻市に生まれる。県立盛岡中学校を経て、盛岡高等農林学校卒。幼い頃より宗教に親しみ、植物、鉱物採集にも熱中、また短歌も数多く作る。22歳頃、初めての童話を書き、以後創作と農業指導に献身。この２つの道は賢治の短い生涯を貫く重要な柱となる。1924年（大正13）「春と修羅」「注文の多い料理店」を自費出版する。これだけが生前刊行の本である。没後、賢治の人格と芸術への評価は高まり数多くの童話や詩集が刊行されることとなる。「よだかの星」はよだかの極まった悲しみを描いて、対極のまことの幸福を激しく求めた傑作である。

浅田 次郎　1951年（昭和26）～

東京都生まれ。自衛隊に入隊、のちアパレル業界など様々な職につきながら投稿生活を続け、1991年「とられてたまるか」でデビュー。悪漢小説の後「地下鉄に乗って」で吉川英治文学新人賞、「鉄道員」で直木賞を受賞。時代小説やエッセイの他、「蒼穹の昴」「中原の虹」など中国歴史小説がある。映画化、テレビ化された作品も多い。日本の大衆小説の伝統を受け継ぐ代表的な小説家と言える。直木賞、吉川英治文学新人賞、山本周五郎賞選考委員。

宮部 みゆき　1960年（昭和35）～

東京都生まれ。87年「我らが隣人の犯罪」でオール読物推理小説新人賞を受賞。89年『魔術はささやく』で日本推理サスペンス大賞を受賞。92年『龍は眠る』で日本推理作家協会賞、『本所深川ふしぎ草紙』で吉川英治文学新人賞、93年『火車』で山本周五郎賞、97年『蒲生邸事件』で日本ＳＦ大賞、99年には『理由』で直木賞を受賞した。本格ミステリーから時代小説まで幅広いジャンルをものする当代の人気作家である。